



No. 157234

〔民具編 Part 2〕

あるじでえ

No. 32

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園

☎ 03 (3417) 8492

◎ 岡本公園民家園

☎ 03 (3709) 6959

平成9年2月1日 発行

平成12年3月 増刷

平成15年9月 増刷

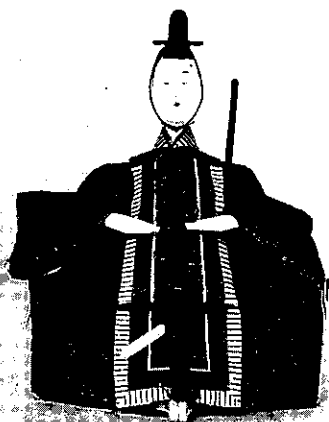
ひな 民家園の雛人形

○ 民家園では、毎年3月の雛祭りの季節になると、茅葺きかやぶきの古民家の座敷に雛人形飾りを行っています。

これらの人形は、世田谷区内の方を初めとした多くの人々のご好意によって寄贈さ

れたものです。年々収蔵点数も増していき、充実した内容となって参りました。

今回はこれらの人形の内、特に江戸時代から明治時代の作と思われる雛人形を中心として、ご紹介したいと思います。



① 享保風田舎雛

江戸後期

高さ 男雛24cm

女雛18cm

伊藤きみ氏寄贈



② 享保風田舎雛

江戸後期

高さ 男雛18cm

女雛14cm

伊藤きみ氏寄贈

☆注意 人形の高さは、基本的たいていに被り物や台を除いた人形本体の頭までの寸法です。
但し、竹田人形及び鴻巣雛は台を含めた寸法を表記しています。



③享保風田舎雛
江戸後期
高さ 男雛24cm
女雛18cm
伊藤さき氏寄贈

きょうほうふういなか
享保風田舎雛

信州の松本付近で作られた雛人形で、別名松本田舎雛とも呼ばれています。

享保風と呼ばれる理由は、江戸時代中期の享保年間（1716～1736）頃に流行した座り姿の内裏雛、「享保雛」の面影を残していることからその名が付けられています。

江戸時代に町家（都市の商家）で流行した享保雛はその衣装に金襴や錦を使った豪華なもので、比較的大ぶりのものが多く

作られ中には60センチを越えるものも見られます。顔は面長で、細く吊り上がり気味の目をしており、一種能面のような印象を受けます。男雛は両袖をピンと張っており、手には笏を持ち太刀を差しています。また女雛は五つ衣（表着の下に着る重ね袴）の裾や膝の部分にあたる赤い袴に綿をたくさん入れて厚く膨らみを持たせているのが特徴です。



④古今雛
江戸後期
高さ 男雛30cm
女雛25cm
伊藤さき氏寄贈

番号①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒の人形は、長野県諏訪市の土族の家に伝わるもので、明治になり持ち主が世田谷に移り住んだ折りに持参したものです。享保風田舎雛や松本押絵雛など、長野県下の雛人形の特徴の見られる大変興味深い雛飾りです。



⑤古今雛
江戸後期
高さ 男雛24cm
女雛18cm
伊藤さき氏寄贈



⑥古今雛
江戸後期
高さ 男雛28cm
女雛25cm
秋山光男氏寄贈



⑦古今雛
江戸後期
高さ 男雛26cm
女雛24cm
秋山光男氏寄贈

番号⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭の人形は、世田谷の旧家に代々伝わる雛人形です。3組の内裏雛の内で最も古いものは、今から約150年前の天保13年（1842）生まれの女性が嫁入りに持参したものと伝えられています。



⑧古今雛
明治17年
高さ 男雛21cm
女雛17cm
秋山光男氏寄贈



⑨古今雛
明治22年
高さ 男雛20cm
女雛17cm
中岡敏雄氏寄贈

こきん
古今雛

江戸時代中期の明和年間（1764～1772）に上野池之端の^{いけのはた}人形問屋大槌屋が日本橋^{おおづちや}十軒店の^{じゅっけんだな}人形師原舟月^{はらしゅうげつ}に作らせて売り出したのが始まりとされています。

その表情は享保雛と比べ一層写実的で精巧になり、それまでは筆描きされていた目にガラス玉や水晶をはめ込んだものも作ら

れるようになりました。衣装にはやはり金襴や錦を用いていますが、さらに金糸や色糸で鳳凰や花などの刺しゅうが施されるなど、複雑で美しい仕上がりになっています。また、この古今雛の様式は現在の雛人形に最も近いものと考えられています。



右大臣



左大臣

すいじん
⑩隨身
江戸後期
高さ 左大臣25cm
右大臣25cm
秋山光男氏寄贈



小鼓



大皮



太鼓



横笛



謡

⑪五人囃子 江戸後期
高さ 謡18cm 小鼓21cm 秋山光男氏寄贈



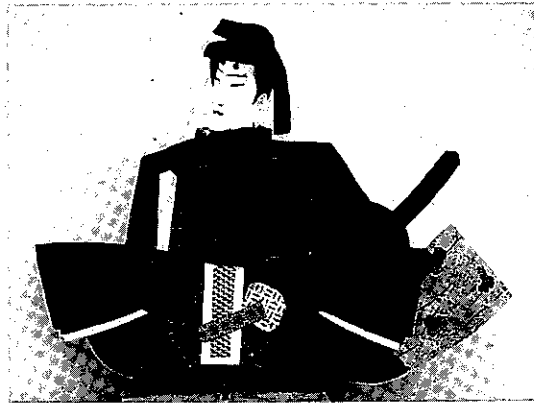
⑫浦島太郎
江戸後期
高さ 22cm
秋山光男氏寄贈



⑬不明
江戸後期
高さ 30cm
秋山光男氏寄贈



⑭老武士
江戸後期
高さ 22cm
秋山光男氏寄贈



⑮松本押絵雛 (男雛)
江戸後期
高さ 34cm
伊藤きみ氏寄贈



⑯松本押絵雛 (男雛)
江戸後期
高さ 30cm
伊藤きみ氏寄贈



⑰松本押絵雛 (男雛)
江戸後期
高さ 31cm
伊藤きみ氏寄贈



⑱松本押絵雛 (恵比寿)
江戸後期
高さ 32cm
伊藤きみ氏寄贈

まつもとおしえ
松本押絵雛

江戸時代後期から明治時代にかけて信州の松本で盛んに作られたものです。松本はかつて城下町であり、そこに住む士族の女性の手内職として発展しました。

かつてこの地方で雛といえはこの押絵雛をさすように、節句には欠かせぬものであったといえます。高価な座り姿の衣装雛に比べ手に入れやすい押絵雛は、行商人に

よって各地へと売り捌かれたようです。このような押絵雛は松本に限らず秋田や酒田などの城下町を中心に全国各地で作られていましたが、松本のは流れるような優美な曲線と優れた動きに特徴があり、その美しさから広く人々に愛されていました。



⑲竹田人形
江戸後期
高さ 33cm
伊藤きみ氏寄贈

たけだ
竹田人形

江戸時代前期の寛文2年(1662)に竹田近江によって創設され、大阪の道頓堀で人気を博した「からくり人形芝居」の人形を模して作られたとされています。



⑳竹田人形 (童児)
江戸後期
高さ 32cm
伊藤きみ氏寄贈

その激しい動きの表現や誇張された顔などにこの人形の特徴を見ることができます。



㉑鴻巣雛 (お軽勘平)
江戸後期
高さ 29cm
伊藤きみ氏寄贈

こうのす
鴻巣雛

江戸時代後期の文化年間(1804~1818)から嘉永年間(1848~1854)に埼玉県鴻巣周辺で作られたものです。

一人立ちの人形に厚紙製の波や桜の木、



㉒鴻巣雛 (唐子)
江戸後期
高さ 21cm
伊藤きみ氏寄贈

人物などを前後に配したもので、素朴な郷土雛の風情が感じられます。明治以降は製作されていない貴重な雛人形です。



㊦嵯峨人形
江戸後期～明治
高さ 17cm



㊦初参人形
江戸後期
高さ 18cm

嵯峨人形

嵯峨人形の起源は定かではありませんが、江戸時代に入り仏師の手によって作られたのではないかと考えられています。

木彫りの人形に胡粉を盛り上げ、岩絵の具や金箔などで濃密な彩色が施されているのが特徴です。また、民家園收藏のものは頭と胴が別々に作られており、頭部を前後に揺ると舌を出す、といった楽しいからくりがしてあります。一般に「首振り嵯峨」と呼ばれているものの一つです。

初参人形

親王（皇族男子）が初めて御所に参上し、天皇に対面した際に賜る人形とされています。

そのような理由から大変丁寧に作られており、髪を稚児輪に結び、刺しゅう模様のある緋縮緬の振り袖、菊綴じの付いた白の長絹袴を身に付けた姿は当時の公家子弟の服装を写しています。

《雛人形飾りの流れ》

雛祭りは人の災いや穢れをヒトガタに移して川へ流す祓えの行事と、源氏物語にも現れる、ひいな遊びが交ざり合い変化したものと考えられています。(あるじでえNo.9参照)

雛祭りが行われるようになった当初は平らな台に布を敷き、夫婦一对の紙雛(紙で作られた立ち姿の雛人形)や内裏雛を並べて置くだけの簡素なものであったようです。

江戸時代も中期になると雛壇の数も2段3段と増え、添えられる人形も能や芝居などを題材として様々なものが作り出されるようになりました。隨身や五人囃子が雛壇に登場するのも江戸中期の明和～天明(1764～1789)の頃と言われています。

そうした中で内裏雛にも多くの流行が生まれます。享保雛や古今雛もその中の一つですが、このほかにも宝暦11年(1761)より江戸で流行した丸顔の愛らしい顔の次郎左衛門雛や、公卿の装束を有職故実に基づいて正しく再現して作られた有職雛などがあります。また、掌に載るほどの小さな人形芥子雛も生まれました。

雛道具も武家の婚礼道具一式を模して作られたものが現れ、江戸時代末期には今日のような雛壇飾りの様式が形作られたようです。